

# 本誌の新生面

## 鞍馬の國手

岡田蝶花形博士から「左横書反對同盟」創立委員に依頼す」と來翰した。愚老は久しき以前より左横書反對論者である。それは決して岡田博士の講釋説明に感服した譯でもなく自分分は日本人が二千數百年來使用して居る文字の構成、運筆の上から文字の死活問題が起る讀方にも多年の習慣上甚だ迷惑千萬、思想戦からは一刻も假借する事を容さぬ重大問題である。西洋文明心醉者が夫れ程の問題とも思はず輕々しくも鐵道驛名を左横書とし下に外人利便の爲に英字を以て標記したるも日本主義の小川大臣は英字を消し左横書を漢字及び日本文字を右横書に書換へさせた。苟くも日本國民であるならば小川大臣のお説を聞く迄もなく當然日本語に直すべきである。然るに其の後十幾年を経て未だ直さぬ無感覺者米英心醉者が残つて居る日本國民の愛國魂を傷けんとして居る。愛國の熱誠に燃ゆる純眞の日本國民淨瑠璃人は斯の如き非國民を日本國外へ放逐すべきである。此の信念を有する愚老へ右の依頼狀が舞込んだ。宛然いきり火を煽り立てる様なので直ちに大賛成。事務所やから標札の調達も依頼された。然諾準備に取からんとするに何やら注意箇條が書いてあれど讀み難き文字で全部諒解といふ譯に行かないから綺麗に讀了する迄延期を申入れて置いた。甚だ不機嫌らしく感じた。がこちらにも愉快だ。此の好問題に接し乍ら注意事項が讀

盡くせぬ愚老の遺憾も想察し給へ。また重友文學士の近松作冥途の飛脚中之巻年とてともまゝ二年下、宮島へもと語るべきであるとの學説に對し、古報、廣助、綱造等が「しも宮島である。貴下(吾笑の事)が皆と同様しも宮島なりといふは不勉強不研究と叱られた。その上重友文學士。木谷蓬吟。吉永文學士も「年とてとも先二年、した」といふて來たと大變なした強氣である。明明地に云へば斯様な事を問題とする程淨瑠璃界は盲滅法界ではないと確信する。愚老の淺薄は、斯の如く博學多才の權威ある名士がした。説を堅持されるとは知らなかつた、故にしも宮島を輕く思ふて居たのは誠に淺薄で濟まなかつた。單に文章の上から云へば其の句切り則ち切斷場所とは自ら明かである。然れども茲には梅川と云ふて忠兵衛の爲なら金も命ちも惜まぬ女が居る、近松の蠟筆によつて此の女的情緒を描寫したる觸りである、その連綿と繋る情緒は斯切つて截れず、文章の切れざる所に自然切斷が出来る、則ちこれが節付けである、故に此の節に文法を以て律すれば藝術破壊の咎めは免かれぬ、茲に虛實の中間を滑る藝の妙味がある藝の力である。した、宮嶋では假しに道理はあるにしても藝にならぬ。しも宮島へも身を仕きり云々で體も命ちも一切を忠兵衛に捧げる眞の梅川である。間と切斷と息と虚實を拘合はせた美妙尊ぶべき至藝で、これには矢も鐵砲も理窟も立衝き得るものではない。願くは文章の是たは諸藝の講釋と人形の動き等互に侵して侵されざる藝の關聯が得たいものである。

東京に三四社統合談ありて拙老へは岡田博士から一片の誘引狀の如きが來た。雖有事である直に好意を謝し其の條件如何と尋ねたるに中川も齊藤も富取も月給である。君も月給なら使ふてやるとの御託宣、眞に統合の意思ありや又統合の主體は如何なる物かを聞かねば何とも確答は出來なかつた。本誌は既に十八年一月十日付社長新良貴健二主筆樋口虎之助兩人並列挨拶したる如く渾然一體となつて同人諸君と共に相携へて斯界の公機として藝術報國に邁進し來り第四百二十四號原稿は十二月十四日締切り印刷所統制事業不進、責任者は監督官廳と多數の愛讀者を合はすべき面目なく加之新良貴社長の名譽を思ひ五十年度の誌歴を抛ち本年一月二十日遂に廢刊届を差出し收支計算準備に取掛りたり然るに三月二十五日西區新町南通二丁目日本出版配給株式會社大阪支店に於ける懇談會席上大阪府當局の指示に由り審議の結果、殘存誌と決定せられたるを覺知し欣躍直ちに其の複刊準備に着手せんと決心すると同時に創刊者の岳父若美の靈に默感謝、多年の愛讀者、尊敬すべき寄稿家に對し感謝、感涙湧たたるのみ。此の時當局より爾今益々國家的郷土的の日本一の文藝誌を目ざして進め各方面に連絡の勞も考へんと懇切極まる激勵に拜伏感泣老軀を捧げ懇懇盡瘁を誓ひ引取りたり。爾來十ヶ月如何にして大阪府當局及び大阪學士會の芳情に應報すべきか夢寐にも念頭を放れたる事なし、十月九日出版會員番號二二〇二七と登録され、天下の公を捧げねば機関、今日の國難に際し一層奉公を捧げねばならぬ、淨瑠璃死活の分るゝ所、斃るとも止まぬ決心。